

守破創
対談

科学、文化、コンピューターなどさまざまな分野で言論活動を展開し、経済学やSFなどの翻訳でも知られる山形浩生氏。その膨大な仕事量はどのようにこなされ、また、どのように広がっていったのか。要点のつかみ方や視野の広げ方などを、同じく多数の著書・訳書がある若田部昌澄副総裁と語り合う。



日本銀行副総裁

若田部昌澄

WAKATABE Masazumi

1965年神奈川県生まれ。87年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、90年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了、91年早稲田大学政治経済学部助手、94年トロント大学経済学大学院修士課程修了、98年早稲田大学政治経済学部専任講師、2000年早稲田大学政治経済学部助教授、05年早稲田大学政治経済学術院教授、17年コロンビア大学経営大学院日本経済経営研究所客員研究員。著書に『経済学者たちの闘い』（東洋経済新報社）、『昭和恐慌の研究』（東洋経済新報社、共著）、『危機の経済政策』（日本評論社）、『ネオアベノミクスの論点』（PHP新書）、*Japan's Great Stagnation and Abenomics* (Palgrave Macmillan) など多数。18年3月日本銀行副総裁就任。



作家・翻訳者・コンサルタント

山形浩生

YAMAGATA Hiroo

1964年東京都生まれ。90年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了、株式会社野村総合研究所入社。95年マサチューセッツ工科大学不動産センター修士課程修了。不動産開発などのコンサルティングのかたわら、科学、文化経済、コンピューターなど広範な分野で言論活動を展開する。主な著書に『経済のトリセツ』（旺紀書房）、『「お金」って何だろう？ 僕らはいつまで「円」を使い続けるのか？』（光文社新書、共著）、『新教義主義宣言』（河出文庫）など。訳書に、クルーグマン『クルーグマン教授の経済入門』（ちくま学芸文庫）、トマ・ピケティ『21世紀の資本』（みすず書房、共訳）など。なお、2018年に株式会社野村総合研究所を退職している。

仕事と遊びの曖昧な境界線から 新たな可能性が広がっていく

時代の変化に合わせて
自分の活動も変えていく

若田部 山形さんは、特定のカテゴリにはめるのは難しい方ですね。野村総合研究所（以下、野村総研）で開発援助に関わってこられました（現在は退職）、一方で、評論家や作家、何より翻訳者として名が通っており、経済学で言えばポール・クルーグマン、トマ・ピケティの翻訳で知られています。非常に多彩な活動をされてきているので、なぜそういうことができるのか、その方法論や仕事術に関心があるのですが、まずは話のきっかけとして、中学生の頃から好きだったというSFやパソコンのことをお聞かせください。最初に読んだSF小説を覚えておられますか。

山形 ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』ですね。ネモ船長がノーチラス号で世界を旅するという物語は、子ども心にとっても印象的でした。その絡みで、同じ作者の『十五年漂流記』も読みましたが、あの作品からは民主主義とは何かを

学んだ気もします。

本格的にSFと出会ったのは中学生になってからです。

若田部 『十五年漂流記』は私も好きな本です。一人ひとりに得意分野があって、その上で協力し合う姿が印象的です。中学生の頃は、パソコンも製作していたそうですね。

山形 NECのビット・イン(注1)とか、その手のパソコンみたいなものがあるのと出てきた時期ですね。専門雑誌が創刊されたりもしていました。よく分からないけど実際には何ができるの? ということで、予備校をさぼって萩原によく出かけていました。

若田部 大学、大学院は都市工学を専攻していますね。何かきっかけがあったのですか。

山形 強い思いというより消去法で、という面が強いのですが、父親が建設会社に勤めていたので、その影響があったのかもしれませんが。

それと、子どもの頃に一年間だけニューヨークにいたのですが、そのときにフランク・ロイド・ライトが設計したグッゲンハイム美術館を見て衝撃を受けたことがあります。ぐるぐる回る螺旋状のデザインですが、子ども心に「すごいや。こんなができるんだ!」と感動しました。そんなこともあって建築の話は好きでしたね。

また、大学時代はバックパック旅行で香港などによく出かけていて、都市ごとの街の成り立ちの違いなどに興味を持っていたというのがあります。

若田部 大学院卒業後、野村総研に就職されています。不動産開発のプロジェクト、開発援助コンサルタントの仕事が多かったのかと思います。どのような経緯で、そうした仕事に就かれたのでしょうか。

山形 野村総研に入ったのにはちょっと経緯がありました……。

きっかけは大学院時代のアルバイトです。学部卒業後に野村総研に入社した同級生から翻訳のアルバイトを持ちかけられたのですが、その内容というのが、ヨーロッパやアメリカのコンサルタントが各国の文化政策をまとめたものを、読んで日本語にしてまとめ直せと

いうものでした。当時、野村総研が文化庁の白書づくりを請け負っていたようで、その資料となるレポートを読むというものだったわけです。

その当時の僕は大学院に通っていたわけですが、そのレポートの中に各国の建築や都市保存に関する政策などへのまとめがあったので、「これを使えば卒論が書けるぞ」ということで、喜んで取り組みました。

それで翻訳したものを要約し、同級生に送ったら、「お客さんから質問が来たから、また頼む」と。そんなやり取りが何度かあるうちに、「こういう仕事なら、自分もここで働いてみたいな」と思ったわけです。

ちょうどバブル景気の終わり頃のこと、テーマパークや不動産のプロジェクトが全国にあり、面白い時期ではありましたが、入社直後にバブルが崩壊しました。

若田部 それで開発援助へ、という感じですか。

山形 最初はテーマパーク、次にリゾート開発という感じでプロ

ジェクトに関わったのですが、バブル崩壊で次々に参加計画が中断し、疫病神扱いされる始末です。そこで、会社の制度を利用してマサチューセッツ工科大学(以下、MIT)に留学させてもらいました。

その間にバブルは本格的にはじけて、帰国したら「これからはアジアだよ」という話になっていったんです。アジアに出ていって民間開発しますよ、と。

そうなると、アメリカで学んできた内部収益率(注2)とかネットプレセントバリュ(注3)といった話がばりばりに使える。これはやった、と思っていたら、今度はアジア通貨危機……。

そういう中で出てきたのが開発援助の仕事です。アジア各国で電

(注1) ビット・イン／一九七六年に萩原に開設したNEC(日本電気)のサービスセンター。

(注2) 内部収益率／投資案件への投資金額の現在価値と、当該投資が生み出す資金の現在価値を等しくする割引率のこと。

(注3) ネットプレセントバリュ／純現在価値。投資案件から将来得られるすべての資金の現在価値と、すべての投資金額の現在価値の差のこと。

力の民営化などの構造改革が叫ばれるようになり、開発やお金、その上の政策、経済的フレームワークといったコンサルティングが自分の仕事になっていったわけです。一方で、その頃からインターネットが広がり出して、自分の活動の一つになっていきました。

だから、時代に翻弄ほんろうされたというか時代のおかげというか、そういう面がかなりあります。

**興味のまま動いていると
いつか仕事につながっている**

若田部 MITには一九九三年から九五年に在学していたということですね。その頃、経済学に出会ったのですか。

山形 はい。不動産経済をはじめ、ファイナンスや経済学の講義を受けました。そのときに、本屋で『クルーグマン教授の経済入門』に出会いました。それが面白かったので、少しずつ翻訳を始めたのです。

あの本に関しては、タイミングが良かったと思います。というのも、あの本の中にあつたアメリカのいろいろな問題が、その後、日

本でも次々に起こったからです。

例えば不良債権問題。日本でちょうど住専問題(注4)が起つていて、アメリカの不良債権を回収したRTC(整理信託公社)というシステムが参考になりました。

ほかにも、企業買収やM&Aなどがあり、あちこちを訳しているうちに半分近くが翻訳し終わったのです。それで、残りもやってみせ、と全部訳し終えてから出版社に持ち込んだところ、出版されました。

若田部 本業とは違う副業ですが、会社はその点について理解があつたのです。

山形 一応、こういうことをやりますという申請はしていません、駄目ということはあまりなかったと思います。

若田部 個人の仕事としてはどうですか。シンクタンクの研究員と翻訳などを両立する難しさはどのようなものでしょうか。

山形 シンクタンクの役割に、「目新しいものを提示して説明する」という一面がありますよね。その点では、僕の活動は完全ではないま

でも、多少はつながっていました。

若田部 時間的なやりくりはどのようなにされているでしょうか。

山形 極端な話、情報収集しているのか遊んでいるのかの切り分けが曖昧というのがありますね。クルーグマンを訳しているのはシンクタンクの仕事なの？と追及されても、「仕事で使いますよ」と当時は言えましたから。

若田部 不良債権処理などで参考にしたわけですからね。

山形 もちろん、かなりの部分は自分の興味で動いています。クルーグマンの翻訳も、結果的に仕事というお金になりましたが、やっているときは自分が興味を持ったから訳したわけですね。

コンピューターやネットのこと、ものづくりなどいろいろやっていますが、半分遊びでもあるし、それが後で別のところで仕事になったりしています。仕事をやっているうちにほかのものが出てくる、ほかのものをやっているうちに何となく仕事とつながってくる、という感じですね。

若田部 それは意図せずには、ですか。

山形 はい。いろいろやっているうちに隙間が見えてくるのです。

例えば「インターネットで経済がどうなるか」といったテーマです。そういう隙間を見つけて、その隙間について勉強をすれば、一時的にはトップが取れる。しかし、しばらくすると学者などが出てきて追い越されてしまうのです。が……。それでも、その頃にはまた何か別のテーマが出てきたりするんですよ。

若田部 クリエイティブな方たちが言っていますが、仕事と遊びの境界線というのは曖昧で、曖昧であるがゆえにもすごい情熱を注げるといふことですね。

(注4) 住専問題／住専とは住宅金融専門会社の略称。バブル経済崩壊後住専が巨額の不良債権を抱えていた問題。

**複雑化する社会の中では
ジェネラリストが不可欠**

若田部 経済学と本格的に出会ったのはMIT時代ということですが、それ以前は、経済学をどう捉



えていましたか。

山形 あまり面白くなかったのと、僕らの頃はポストモダンの全盛で、「今の経済学はもう駄目だ」という話を聞かされていたのですね。そのせいで、講義もほとんど真面目に聞いていませんでした。

若田部 それが、クルーグマンの本で変わったのは、社会人を経験

して、ファイナンスの話とか、プロジェクトにもお金の話が大事だと気付いたということなのでしょう。

山形 そうなりますね。クルーグマンのあの本が最初に読むのに良いのは、経済学なんて基礎的には三つのことしかないんだ、経済成長率とインフレと所得分配。この三つなんだけど、どれもよく分かっていないんだよ——という話から入ってくれるところ

ですね。でも、ここまでは分かっている、世間で出ているこういう話はピント違いだよと教えてくれるので、ありがたい構成です。
若田部 確かに「経済学者は上から目線でものを書く」とよく言われます。でも、研究とか物事が面白いのは、分からないことがこうなっています、と解いていくとこ

ろにあるはずですよ。

山形さんはいろいろな分野に関わっていますが、その分野の要点を押さえるのにどんな工夫をされているのでしょうか。

山形 まず一番薄い本をぱっと見でだいたいの枠組みをつかむ。次になるべく分厚い本を見て、「こういうテーマが上がるのね」と注目点や傾向を押さえる。そうすると、ほかの本を見たときに「この本はこのテーマを中心しているな」と見えてくるので、本の全部を細かく読む必要がなくなります。だから、まず全体像が分かるようにして、そこから入っていく感じだと思います。

若田部 そのようにして広範な分野に関わる山形さんは、ジェネラリストと呼ばれるようですが、この点についてはいかがでしょうか。

山形 そうですね、僕はジェネラリストです、圧倒的に。昔、大学の同期から「山形はあらゆることについて二流だけれども、それが強みだ」と言われて、そういうのを目指したいよねと。

僕はジェネラリストは必要だと

考えています。地球温暖化の問題でも何でも、各種問題の中でどれを重視するかというのはジェネラリストでないと判断ができないはずですから。

若田部 確かに。いろいろなものを比較しないといけませんからね。
山形 スペシャリストも大事なのですが、ちゃんとしたジェネラリストがいないと、「今はこれがトレンドだからこれで行くぜ」みたいな話だけで、判断に際してのさじ加減を決められてしまう恐れがあると思っています。

若田部 お話を伺って三つの点が印象的でした。一つは、才能の開花には時代や人との出会いといった偶然が大きく作用していること、二つ目は、仕事と遊びをむしろ分けて、それが合わさるところというか、曖昧なところが創造的な仕事を見つけられることが創造的な仕事には大事なことで、三つ目に、専門知識が高度化する社会にこそ山形さんのようなジェネラリストが必要だということです。

本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。